

へき地地域包括ケアを担う
看護人材育成・確保循環型システム構築
調査研究事業報告書

やまぐち ルーラルナースング ネットワークをめざして



山口大学医学部保健学科
へき地看護人材研究プロジェクトチーム

Organization | 研究組織

研究統括

牛尾 裕子（山口大学医学系研究科保健学専攻教授：地域看護学）

村上 祐里香（山口大学医学系研究科保健学専攻助教：地域看護学）

永田 千鶴（山口大学医学系研究科保健学専攻教授：在宅看護学）

伊東 美佐江（山口大学医学系研究科保健学専攻教授：助産学）

田戸 朝美（山口大学医学系研究科保健学専攻教授：急性期看護学）

小野 聡子（山口大学医学系研究科保健学専攻准教授：基礎看護学）

原田 昌範（山口県立総合医療センターへき地医療支援センター長）

山口大学医学部保健学科看護学専攻4年生

©2023年度／藤井 翔夢、高原 杏奈、寺崎 摩璃愛

©2024年度／朝鍋 綾音、井上 日万梨、朝野 まなか、宮元 杏乃

当事業は「公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団」の助成を受けて実施しました。

Project

事業概要

2023.9-11

調査1

へき地診療所看護職及び医師へのインタビュー調査

2024.2.16

報告会

やまぐちへき地看護シンポジウム(調査報告会)

2024.8-9

調査2

へき地地域に所在する診療所・訪問看護事業所・
地域包括支援センターの看護職の学習ニーズ等の調査

2025.3.4

報告会

やまぐちへき地看護講演会・調査報告会

2025.3.7

プロジェクト会議

やまぐちへき地看護人材育成検討会議

Greeting

ごあいさつ



山口大学大学院医学系研究科
保健学専攻地域看護学教授

牛尾 裕子
Yuko Ushio

へき地保健医療対策地域は医療の確保が課題であり、山口県は県土の約6割を占めています。このような地域は過疎化とともに高齢化がすすみ、地区によっては一層深刻な状況で、保健医療のみでなく生活を支える様々なサービスや活動の担い手不足に直面しています。住民の健康生活維持は、保健医療や福祉のみで完結せず、多様な分野の関係者・住民と知恵を出し合い、連携協働して展開する地域包括ケアが求められています。

看護職は、このような地域における医療の主要な担い手であるとともに、地域包括ケアの中心的担い手やコーディネーターの役割も期待されます。

一方看護人材確保に目を向けると、看護学生の職業選択の傾向は所在地が重要な選択条件であり、へき地地域の保健医療機関・事業所が卒業時就職先の第一選択となることは、少ない状況です。将来的な看護人材の確保のためには、看護基礎教育において、へき地保健医療の重要性やその魅力を知ることが鍵になると考えました。

そこでこの事業では、看護学生とともにへき地保健医療の現状を調査研究することを通して、山口県のへき地保健医療の課題や看護人材確保・育成の方策を検討するのみでなく、同時にそこでの看護の意義や魅力を明らかにし、これをもとに魅力ある看護実践の開拓・発信・人材確保への示唆を得ることを目的としました。この事業で実施した2つの調査研究はいずれも、山口大学医学部保健学科の看護学生が卒業研究として参加しました。また本事業には県内の関係する多くの方々にもご参加いただき、様々なご意見や示唆をいただきました。

人口減少少子高齢化が進行する日本では、自治体間の人口規模の格差拡大が進行し、2040年には人口1万人未満の自治体が35%を超えると予測されています。山口県においても県人口の全体的減少が進行することが見込まれています。へき地医療対策地域の課題は、へき地に限らず県全体の課題であるともいえます。この事業成果を通して、山口県の保健医療の未来へのヒントを得ることができればと考えます。

Interview

へき地診療所看護職・医師へのインタビュー調査

調査目的

- 1 看護実践内容を調べ、へき地診療所の看護実践が地域に対して果たしている役割機能を明らかにする。
- 2 へき地診療所看護職に必要な能力・教育支援体制を明らかにし、看護職への教育支援方法を検討する。

■対象者／山口県内のへき地医療対策地域に5年以上勤務する看護職・医師

■調査方法／対面またはオンラインによる個別インタビュー調査

■調査項目／

看護職	看護実践内容、やりがい、困難や成長につながった経験、希望する教育内容や教育支援体制の現状など
医師	看護職に求める能力や教育の課題など

■調査時期／2023年9～11月

■協力者の基本属性／

	協力者数	性別	年代	診療所の地域特性
看護職	6名	女性6名	30～60代	中山間4名、離島2名
医師	3名	男性2名、女性1名	30～50代	中山間3名

調査結果

結果▶看護実践内容からみた地域に対する役割機能

へき地診療所看護職は、地域に密着しプライマリレベルの保健医療ニーズに対する多種多様な役割を、一手に引き受けている

外来医療

- 診療の事前準備・問診・アセスメント
- 受付時の緊急性判断
- 検査の介助・実施(レントゲン撮影・胃カメラ含む)
- 診療の補助
 - ・患者の理解状況の把握や本音を引き出す
 - ・長年の経過や生活背景を知る立場から医師に情報を伝える
 - ・本人の生活に合わせた処方について医師に助言
- 調剤・服薬管理
 - ・生活に合わせて飲み忘れのないように分包支援
 - ・残薬を持ってきてもらい、確認して服薬管理
- 予防・健康教育
 - ・禁煙外来での禁煙支援
 - ・疾病やけがの予防などの掲示物作成

在宅医療支援

- 往診・訪問診療への同行
- 24時間対応支援
 - ・医師不在時の医療へのリンケージ
 - ・夜間・急変時の対応
 - ・求めに応じた対応
 - ・電話相談のトリアージ、処置や対応の指導

地域健康支援

- 地域行事での救護
 - ・町民運動会、ふるさと祭りでの救護
- 学校保健業務への同行
 - ・内科健診や学校保健委員会など
- 産業保健分野の健康管理
 - ・町内の企業や市職員の職場健診受託
- 地域に出向き住民への健康教育
 - ・健康教室で季節や地域に応じた健康講話
 - ・高齢者の閉じこもり予防教室での健康教育
 - ・糖尿病サロンを開催
- 地域で開催される多職種連携会議への参加
 - ・診療所での看取りケア事例の報告
- 地域の生活実態の把握
 - ・野焼きによる健康被害リスク
 - ・地域住民同士の関係性

新型コロナウイルス感染拡大時の対応

- 感染者からの電話・外来での相談問い合わせへの対応
- 感染者の在宅療養支援
 - 発熱等の電話相談への対応、訪問による検査、院外処方への対応、毎日の電話による健康観察
- 自治体への報告業務
- 濃厚接触者の把握と対応

住民の担当ナース

- ・傷の状況を見てほしいと自宅にくる
- ・夜間に不安だと何度も自宅に電話がかかる
- ・休診日に自宅に電話で相談がある
 - 「いやだとは思わない、いつでも電話できるとすると不安もなくなり、電話はかからなくなる」
 - 「なぜ今日? 昨日の診療時間中に受診してくればよかったのにと思うときもある」
- ・看護師としてではなく、一人の人として最期までみてあげたい
- ・朝おなか痛いと相談があった人に、夕方どうなったか、こちらから電話で聞く
- ・「今入院している」と住民から診療所に電話で報告がある

研究・サービス開発

- ・オンライン診療のモデル事業への参加
- ・移動診療車開発企業から求められて意見を述べる
- ・外来で地域特有の健康課題の調査をする
- ・診療所で実施している健康教室の評価研究

- 看護師のみの訪問
 - ・介入困難なケースへのアウトリーチ
- 関係機関との連携による見守り
 - ・関係者と連携してリスクを抱えたケースの見守り
- 看取りケアと看取り後の家族ケア

診療所マネジメント

- 資産管理
 - ・薬剤の在庫管理
 - ・胃カメラ、分包機の修理や買い替えのための本庁との調整
- 医師とのパートナーシップ
 - ・医師と良い関係を築くことを心掛ける
- 人材育成
 - ・退職後も看護職の機能が継続するように二人体制要望
 - ・研修・学会発表に出張するための旅費等の要望
- 医療看護サービスの質管理・維持
 - ・安全な調剤の流れづくり・ルール化
 - ・看取りの関わりの記録化
 - ・医師対応を中止した土日の医療対応ニーズの調査

結果 医師からみた看護職に必要な能力

アセスメントやトリアージ、診察の補助といった基本的な看護技術に加え、主体的に実践や学習に取り組む姿勢が期待されていた

- 対象者の価値観を尊重し、興味関心を示せる技術・態度
- 患者家族・診療所スタッフとのコミュニケーション技術
- 基本的な看護手技・検査補助技術
- アセスメント・トリアージ技術
- 救急対応の知識・技術
- 患者の本音を引き出し、生活背景や地域特性を把握した診察サポート技術
- 住民や看護学生への教育・発信技術
- 主体的な学習と実践をする技術・態度

結果 教育支援体制の希望

- ◎オンラインでの研修や近隣地域での実施、研修情報の入手しやすさが求められていた
- ◎孤独感の軽減や自己学習の意欲向上を図るためにも、他診療所や地域が多職種と学び合える場の整備が重要である
- ◎近隣病院による研修支援や代替勤務体制、旅費の確保など、研修参加を可能にするための環境整備も不可欠である

- オンラインでの研修
- 市内や隣市など近場での研修
- 休診日や日勤後の研修日時の設定
- 全国学会に対面で参加
- 研修情報への容易なアクセス
- 他診療所と共有・つながる機会
- 週1回病院研修でX線や胃カメラ等の技術が修得できる体制
- 研修参加時の人的支援体制(代替勤務)
- 研修旅費の補助
- 助言・指導するメンター
- 教育のベースとなる現場の働きやすさ(雰囲気や休暇など)

研究に取り組んだ学生より (2023年度山口大学医学部保健学科看護学専攻4年生)



卒業研究を通して、実際にへき地診療所に足を運ぶことで高齢化が進み、交通手段が限られる環境で暮らす地域住民にとって診療所はとても大切な存在であることを実感しました。また、へき地診療所看護師へのインタビューを通して働く上でのやりがいや魅力を聞き、今まで知らなかったへき地医療への興味が深まりました。将来的にはこれらの経験を活かし、看護職として地域医療に貢献をしたいと考えています。

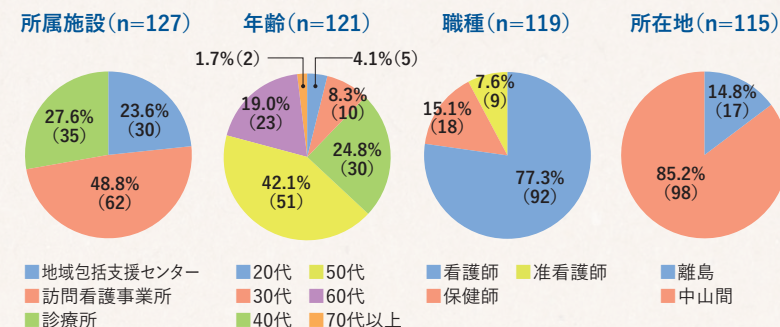
大阪赤十字病院 藤井 翔夢

Questionnaire

へき地医療対策地域の看護職へのアンケート調査

調査目的

県内へき地医療対策地域において、住民に身近な看護を提供する施設の看護職の学習ニーズと多職種連携の実態を明らかにする。



所属施設の看護職人数/3人以下が36.2%、6人以下が80%
施設の正規職員数/6人以下が75%

130人の回答を得た
(回収率51.4%)

調査結果

結果 看護職の学習ニーズ

看護職の看護専門分野の学習への要望は高い傾向

学習ニーズアセスメントツール臨床看護師用*(病院勤務のスタッフ看護師用に開発されたもので、学習したいと考える知識や技能などで構成され、学習への要望の高さや要望の高い学習内容を調べる尺度)を用いた。学習への要望の高さを示す総得点の平均は、診療所看護職124.9、訪問看護事業所看護職134.9、地域包括支援センター看護職126.7、全体130.1であった。

臨床看護師を対象にした先行研究の140点台と比較すると低いですが、病院と異なる所属にもかかわらず、多くの項目において必要との回答が大半を占め、調査に協力した看護職は、看護専門分野の学習への関心や意欲が高い傾向にあったといえる。

*三浦弘恵, 舟島なをみ(2006): 学習ニーズアセスメントツール臨床看護師への開発. 看護教育学研究; 15(1): 7-19.

調査結果

結果 学習ニーズが高かった項目

災害看護、家族看護、多職種連携は、へき地診療所・訪問看護事業所・地域包括支援センターに共通して学習の要望が高かった。人材育成と看護職同士の連携強化の双方の観点から、地区内で共通のテーマで学習する機会の提供が方策の一つにあげられる。

施設別学習ニーズ

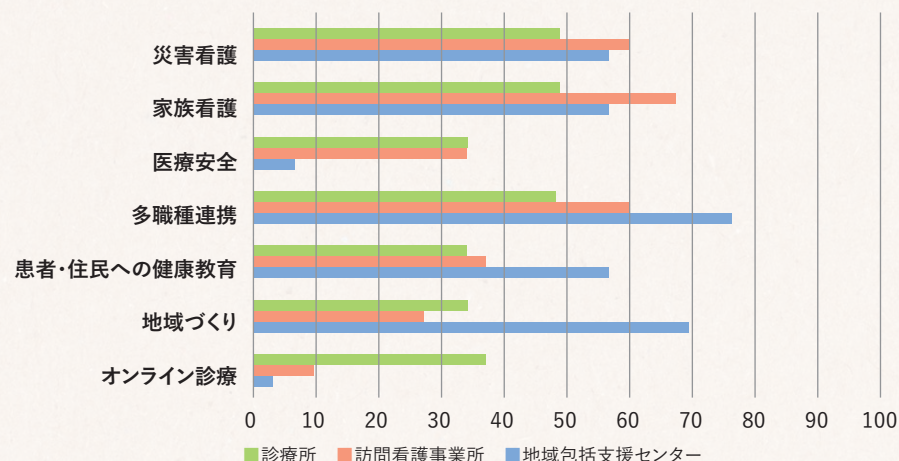
学習ニーズが高かった項目

*「とても必要」と「必要」の回答を合わせた割合

診療所	●感染予防の方法(93.1%) ●日々の看護実践に必要な基本的な知識技術態度(89.6%) ●急変時の対応方法(86.2%) ●コミュニケーション技術(86.2%)
訪問看護事業所	●地域・在宅看護の知識(100%) ●状況に応じた看護過程展開技術(95.0%) ●急変時の対応方法(93.4%)
地域包括支援センター	●感染予防の方法(87.4%) ●地域・在宅看護の知識(83.4%)

施設別学習ニーズ(独自設定項目)

項目別研修機会が必要と回答した者の割合



結果 看護職からみた地域の医療介護福祉の地域連携

先行研究(阿部,2014*)で示された平均得点(2.9点)と比較して、へき地地域における多職種連携は看護職の視点から良好であると考えられた。

医療介護福祉の地域連携尺度* 施設種別の合計得点の平均

施設種別の合計得点の平均点(標準偏差)			
診療所	訪問	包括	全体
3.70 (0.35)	3.80(0.28)	4.20(0.25)	3.87(0.29)

*地域の医療介護福祉従事者間の連携を評価する尺度。「他の施設の関係者とやりとりができる」等、6つの下位因子、26項目で構成され、そう思わない1点～そう思う5点で回答を得た。

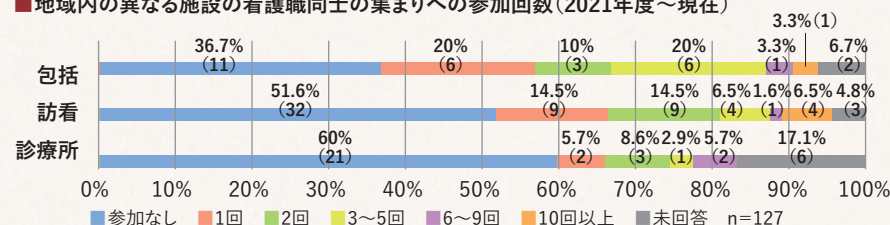
阿部 泰之, 森田 達也.「医療介護福祉の地域連携尺度」の開発.Palliative Care Research 2014;9(1):114-120.

結果 地域内で看護職同士が集まる機会

◎地域内の看護職同士の集まりに「参加していない」と回答した割合は、診療所60%、訪問看護事業所51%、地域包括支援センター36%であった。

◎施設をこえた看護職の交流の場を設け、他施設の実践から刺激やフィードバックを得ることで、学習意欲の向上につなげることが重要である。

地域内の異なる施設の看護職同士の集まりへの参加回数(2021年度～現在)



研究に取り組んだ学生より(2024年度山口大学医学部保健学科看護学専攻4年生)



本研究を通して、限られた資源や人材の中でも学ぶ姿勢を持ち続けながら働く看護職の存在と、支援体制が十分とは言えない現状を認識しました。学生視点から課題や方策について検討を重ねる中で、へき地医療への理解を深める機会となりました。将来、そのような地域医療に関わることも選択肢の一つとして考えながら、日々の業務を通して実践力を養い、多様な現場で力を発揮できる看護職を目指したいと思います。

山口県立総合医療センター 朝野 まなか

2023年度開催 やまぐちへき地シンポジウム(調査報告会)

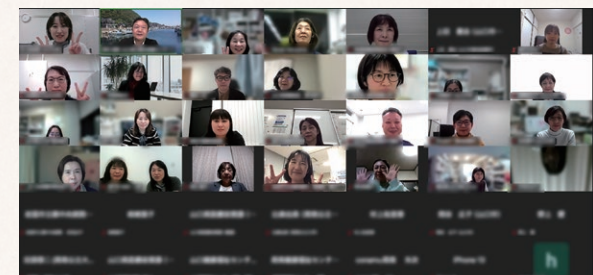
- 日 時／ 2024年2月16日(金)18:00～19:30
- 対 象／ へき地看護に関心の高い医療保健福祉職、学生など
- 場 所／ 山口グランドホテル
※対面とオンラインのハイブリッド開催
- 参加者／ 35名
- 主 催／ 山口大学大学院医学系研究科保健学専攻
- 後 援／ 山口県立総合医療センターへき地医療支援センター
公益社団法人地域医療振興協会山口県支部
- 内 容／ シンポジウム「へき地診療所看護の魅力」
 - (1)へき地診療所看護職と医師への聞き取り調査結果報告
 - ・へき地診療所看護職の就労継続の要因
高原 杏奈, 寺崎 摩璃愛, 藤井 翔夢(山口大学医学部保健学科看護学専攻4年生)
 - ・へき地診療所看護職の教育支援ニーズ
牛尾 裕子, 村上 祐里香(山口大学大学院医学系研究科保健学専攻教員)
 - (2)医師の立場からへき地診療所看護職に期待すること
原田 昌範(山口県立総合医療センターへき地医療支援部)
 - (3)全体討議



へき地医療支援センター、へき地診療所医療関係者、県医療政策課、保健所や市保健師、看護協会会長、看護大学生、看護大学教員などが参加した。診療所看護職からは「普段の業務を見える化してもらい、勇気づけられた」、医療人材確保担当の自治体職員からは「学生や若い人にへき地看護のやりがいを知ってもらい、学ぶ機会を提供する必要がある」、看護協会会長からは「医師だけでなく看護職の支援の充実を」などの意見があった。改めてへき地看護の役割機能や魅力が言語化され、看護職人材確保にもつながるような教育支援体制構築の必要性を実感する機会となった。

2024年度開催 やまぐちへき地看護講演会・調査報告会

- 日 時／ 2025年3月4日(木)17:30～19:30
- 対 象／ へき地看護に関心の高い医療保健福祉職、学生・教員など
- 方 法／ オンライン
- 参加者／ 55名
- 主 催／ 山口大学大学院医学系研究科附属看護実践教育センター
- 後 援／ 山口県立総合医療センターへき地医療支援センター
公益社団法人地域医療振興協会山口県支部
- 内 容／ 「やまぐちルーラルナーシングネットワークをめざして」
 - (1)講演会
へき地医療対策地域における看護人材育成・確保の展望
講師:春山 早苗 先生
(自治医科大学看護学部教授)
 - (2)調査報告会
山口県内へき地医療対策地域における看護職学習ニーズ実態調査結果
・へき地における住民の医療・介護ニーズ
藤井 美夢花(山口大学医学部保健学科看護学専攻4年生)
・へき地の看護職の学習ニーズと関連要因
牛尾 裕子(山口大学大学院医学系研究科保健学専攻教員)
・へき地の看護職の多職種連携の実際
村上 祐里香(山口大学大学院医学系研究科保健学専攻教員)



病院、診療所、訪問看護ステーションの看護職や医師、行政関係者、大学教員、学生などが参加した。参加者からは、「看護学生に実習指導しているが、現場に興味関心を持ってもらうには、私自身がへき地看護を理解し楽しむことだと気づいた(診療所)」「人材確保は、他機関と協力しながら行いたい(訪問看護)」「診療所看護職と保健師がつながるという新たな視点を得た(行政)」「看護機能の集約化、ネットワークが実現できるように考えていくべき時期(行政)」「根拠となる情報を持ち、自分の立場でできること、今後の可能性が少し見えた気がした(その他)」などの感想があった。へき地看護職の人材育成・確保における今後のあり方を考える機会となった。

2024年度開催 やまぐちへき地看護人材育成検討会議

■日 時／ 2025年3月7日(金)18:00～20:00

■場 所／ 山口グランドホテル

■参加者／ 18名

■主 催／ 山口大学医学部保健学科へき地看護人材研究プロジェクトチーム

■共 催／ 公益社団法人地域医療振興協会山口県支部

■内 容／ (1)情報提供

「地域医療の質向上のための看護人材育成の取り組み」

大海 佳子 氏(公益社団法人地域医療振興協会地域看護介護部部長)

三浦 稚郁子 氏(公益社団法人地域医療振興協会地域看護介護部次長)

(2)意見交換

・講演調査報告

・情報提供を受けての感想

・それぞれの立場でこれから取り組みについて考えたこと



山口県内のへき地医療対策地域における看護人材育成・確保の現状と課題について検討することを目的に開催した。県看護協会、県医療政策課、へき地医療支援センター、へき地診療所医師・看護師、訪問看護・地域包括支援センターの代表者、看護系大学教員などが出席した。看護過程展開やアセスメント能力の強化が求められる中で、へき地の看護職に対する支援体制をしっかりと構築する必要性が再確認された。

Message

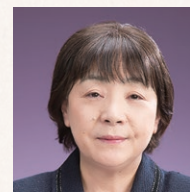
メッセージ



山口県立総合医療センター
へき地医療支援センター

原田 昌範

離島へき地をフィールドに、学生さんとも交えての調査・研究、報告会の開催、学会でご発表など、本プロジェクトの取り組みに心より感謝申し上げます。変化が激しく課題先進地域でもある「離島へき地」は、将来の日本の姿とも言われます。しかし、多くの課題がありながら同時に、医療人が忘れてはならない「人や地域とのつながり」、「豊かさ」を身近に感じることができる場所でもあります。医療資源が限られているからこそ、知恵や工夫が生まれます。人口減少社会のキーワードは一人ひとりの「多機能化」です。このたびの研究で、へき地看護では、総合的な看護能力が必要とされ、幅広い経験ややりがいを得られることを具体的に示していただきました。この取り組みを通じて、大学、医療機関、行政や看護協会を始めとした県内のルール・ナーシング・ネットワークが構築されつつあることを心強く感じています。



公益社団法人
山口県看護協会

西生 敏代



山口県健康福祉部
医療政策課看護指導班

國富 和美

看護は、人々の地域での療養生活を支える最も身近な医療専門職として、その役割を発揮していかなければなりません。特に、へき地医療においては医療の視点だけでなく生活を支える看護が必要とされ、その人にあった最適な支援を提供することが大切です。

このような中、県内へき地医療対策地域の看護人材育成支援体制の現状と課題を明らかにされ、看護人材育成・確保支援等を検討されていることは意義のあるものと考えております。

山口県では、中小規模の病院やへき地、在宅医療分野等を中心に看護職員の確保が厳しい状況にあります。そういった中で、看護基礎教育の段階から、へき地保健医療の重要性やその魅力を知る機会が得られることにより、これからの看護学生が就職する際、また一旦離職した後の再就職の際の選択肢として繋がることを期待しています。

今後、看護職確保施策を検討するにあたり、今回の研究成果を参考とさせていただきたいと思います。

Massage

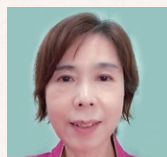
メッセージ



岩国市立本郷診療所
森川 真粧美

へき地診療所に勤務して26年。人材不足や看護以外の業務の多さといった多くの課題がある中、限られた資源を最大限に活かし、地域で暮らす住民の健康をサポートする仕事に大きな喜びとやりがいを感じてきました。

今回の報告を機に、人材育成支援体制の構築や働きやすい環境整備がさらに進むことで、次世代のへき地看護師が育ち、地域のコーディネーターとして活躍してくれることを期待しています。



萩市国民健康保険
むつみ診療所
野尻 妙子

糖尿病患者が生活習慣を振り返り、語れる場「糖尿病サロン」を地域で開催しています。診療所スタッフ4名で、糖尿病教育に携わるには限界があります。そこで、行政保健師と協働することで、リハビリ専門職や管理栄養士、糖尿病療養指導士・歯科衛生士・医師・保健師・看護師(他の診療所)と連携し、運動療法や栄養療法など専門性を深め、併せて転倒予防などの予防的ケアも実践しています。医療的側面と生活的側面から問題をとらえ、医療・福祉・行政が連携し、生活を支えていると感じるこの環境に魅力を感じています。



山口県訪問看護
ステーション協議会
磯本 一夫

当該事業に関するご尽力への感謝とともに、事業報告書の発行にあたり一言申し上げます。地域包括ケアの要である訪問看護の充実、へき地における看護人材の育成と確保なくして実現できません。本事業の調査・研究により、教育と実践の連携が強化され、地域で支え合う循環型システムの礎が築かれることを心より期待しています。当協議会としても、今後も現場の声を生かし、看護人材の育成と活躍を支援してまいります。



美祢市
訪問看護ステーション
柴崎 恵子

私は、へき地と言われているところで訪問看護師としてまた、管理者として長年勤務しています。人材確保には長年苦労しており、永遠のテーマです。病院併設の訪問看護ステーションでは、病院の人員が確保できなくなると訪問看護の看護師が後回しになるということが繰り返されてきているように思います。地域包括ケアのためにはどちらも大切な看護人材です。

この度の看護人材育成・確保循環型システムの構築の方略の検討を継続され、システム構築に繋げていただくことに大きく期待しています。



山口市健康増進課
健康づくり徳地担当
岡谷 広子

へき地は、住民との距離が近く、医療だけでなく「生活を見る視点」が必要です。そのため、多職種連携を通してチームに関わることが看護職の資質向上にもつながり、より看護の専門性を考える機会になっていると思います。

徳地でも学生実習を受け入れているので、へき地看護職の魅力、やりがいを伝え、感じてもらえるよう尽力したいと思います。



山口大学大学院医学系
研究科附属看護実践教育
センター長
伊東 美佐江

やまぐちルーラルナーシングネットワークをめざした事業について、研究支援部門長である牛尾裕子教授のリーダーシップの下、参加し報告ができましたことを心から嬉しく思います。へき地を含む地域の看護職のみなさんが、仲間とつながりながら学び合い、住民の健康と暮らしを支える力を育んでいくことは、私たちにとって大切な願いです。本事業がその一歩となり、これからの地域包括ケアを担う人材の育成と看護の広がりにつながることを心より期待しています。

Editor's note | 編集後記

本報告書は、へき地医療対策地域における看護職のエンパワメントを図るとともに、ネットワーク構築のきっかけとなることを目指し、作成しました。

本調査は、卒業研究の一環として学生とともに行ったものです。へき地診療所で勤務する看護職へのインタビューを通じて、診療所内にとどまらず、地域に出向いた健康教育や、気になる住民へのアウトリーチ支援など、予防的かつ自律的な実践を行う看護職の姿に深く感銘を受けました。へき地での看護は、地域で生活する人々の人生に寄り添う「看護の原点」だと感じ印象に残っています。調査に参加した学生たちも目を輝かせながら取り組んでおり、看護職としての成長に資する貴重な経験となりました。

ご多忙の中、調査にご協力いただいた皆様、ならびに貴重なお意見やご支援を賜った関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。



山口大学大学院医学系
研究科保健学専攻
地域看護学助教
村上 祐里香